

第 28 回アパ工研セミナー 6.24

(2015 年 6 月 24 日、江戸東京博物館会議室)

【講演 1】「ISO/TC133 WG3 サイズインターバルの国際標準規格は必要か？」

ISO/TC133 国内審議委員会分科会委員

(株)ワコール 中川原正人氏

中川原氏は、日本ボディファッション協会及び(株)ワコールホールディングス・(株)ワコールの JIS サイズに関わる説明をした後、JIS L 4006 とそれに関わりのある ISO4416、ISO/TR10652 の概要や、ISO/TC133 の活動休止とその後のヨーロッパでの動きなどを解説した。次いで、2010 年の活動再開における WG3 のフランス提案のうち、サイズインターバルに焦点を絞り込んで問題点を抽出するとともに、サイズインターバルの国際標準の必要性にも話を進めた。



JIS L 4006 と ISO4416

JIS L 4006 は、1981 年に発行された ISO4416 を基にしている。対応する部分であるファンデーションの用語の定義、基本身体寸法、表示およびラベル付けについては対応 ISO を翻訳し、付属書に規定した。また、それに規定されていないカップ体型区分、サイズの種類及び呼び方、サイズの表示方法などの規定は JIS として本体に規定している。

ISO4416 は、1981 年に制定されたが、用語定義、身体基本寸法、表示については実質的規定がない。また、ISO/TR10652 は、表示順位、インターバル、サイズ呼称に係る構造標準を目指したが、TR(テクニカルレポート)に終わった。TC133 は、1980 年に ISO4416 を、また 1990 年に ISO/TR10652 を残し、以降活動を休止した。ISO4416、ISO/TR10652 とともに構造標準としての IS にならなかった。

CEN の対応

一方、欧州では CEN(欧州標準化委員会)で 2000 年代初めに、ISO/TR10652 で EN13402 を生んだ。CEN の TC246WG10 で、身体寸法計測法の EN13402-1 とプライマリー・セカンダリーサイズ表示方法の EN13402-2 について合意が成立。イタリア総会で示された基本身体寸法とインターバルの規定である EN13402-3 は 2004 年に合意されたが一枚岩ではないことが分かった。CEN ではサイズをどう読もうかという EN13402-4 を審議していることが分かっているものの、これも

EN13402-3 で反対している国々が審議拒否をしているのど問題が多い内容となっている。

#### ISO/TC133 と ISO8559-3

中川原氏は、2010 年の ISO/TC133 の再開と WG3 の流れを説明（略）した後、サイズの表示順位に関する規格 CD8559-2 がイタリア大会での議論を経て、今年 DIS 投票され可決されたこと（次は FDIS 投票）。また、サイズインターバルの規格である WD8559-3 が 1 年前のイタリアの総会でフランスからアイデアとしてプレゼンされたこと。ISO8559 シリーズと CEN の EN13402 シリーズとの類似性、ヨーロッパ内での構造標準に対する考えの違い一一などを説明した。

#### ISO8559-3

ISO8559-3 についてはかねてから、サイズインターバルの構造標準として固定値が提案されるのではとの懸念が持たれていたが、フランスからの提案では、インターバルの数値を規格決定するのではなく、体型調査のデータをどのように分析してインターバルを導き出すかの“方法論”を ISO で規格化していこうというものだった。日本はその考え方に基本的に賛成として投票した。その結果は、19 か国が投票し賛成がフランス、イタリア、スペイン、イギリスなど 10、反対 3、アブステイン（棄権）が 6 で、NWIP としては賛成が過半数を占めたので承認された。反対が 3 はベルギー、デンマーク、スウェーデン。ヨーロッパ内で、賛成している国と反対している国が明白になった。この 3 か国は、この規格に反対でありながらドラフト作りに参加することを表明している一一つまりドラフト作りを妨害する一一ために参加することが考えられる。

#### 今後の見通し

このテキストの見通しだが、昨年 11 月に NWIP が登録されているので、今年 9 月の東京の総会で実質的な審議をして CD 投票に掛けることが必要。ただ、このドラフトが未完成であり、中味を決定するためにも CD 投票で P メンバーの 3 分の 2 以上の賛成が必要。日本でもこのテキストを使って体型を分析した結果、インターバルを出したが、ドラフトとしてレベルが低いことが分かり、このままのクオリティでは賛成しかねるとの指摘があった。日本女子大などの協力を得てインターバルを計算したところウエスト 14 ㏍、ヒップ 13 ㏍というインターバルが出たため「使えない」と指摘された。それで、その結果やクオリティアップのために意見交換したいとの内容をフランスに何度も通知したが、フランスからは全く反応がない。

以上のことで、全くの未完成のドラフトであり、さらにヨーロッパでも意見が割れている。従ってテーマである、「サイズインターバルの国際標準は必要か」

については、“必要がない”ということであり、うまく機能している現状のシステムが壊れることに加え、①技術的・経済的・消費者利便性の損失②表示の世界標準化（8559-2）で十分③返品減少に繋がらないことと、インターバルの統一はフィッティングの向上とイコールではない④新しい“体に合う服を選ぶための技術”が進化している⑤顧客の要望に合わせて服を作るという、服作りの自由度の制約——などが主な理由。こうした規格は、世の中のニーズに柔軟に対応しないとイケないと思う。

## 【講演 2】 ISO-TC133 CD 18890

Clothing —Standard method of garment measurement

日本アパレル工業技術研究会 常任顧問

中山 悦朗氏

WG4 CD 18890

中山氏は CD18890 について、「この規格は製品の計測で、部位・計測点が決めにくい。先ほど、中川原氏の言われた ISO8559-1 は、ヌード・裸の人間を計測するやり方。基準点はすべて骨になる。骨から骨を測るのがヌードの時の測り方で、基点がはっきりしているので、誰が測っても同じ結果が出る。CD 18890 は製品を測るので、基準点がはっきりしないという欠点がある」——いう CD 18890 の特性を示した。ついで、CD 18890 の審議経過について資料に基づいて説明した。その要点をまとめた。



### 経緯

この国際規格は、異なる種類の衣服の寸法を決定するために使われる測定点と方法を定義するもの。その測定点がヌードの場合と製品の場合では異なり、曖昧になっている。ガーメントのカテゴリーは、オーバーコート、ジャケット、ソックスなど 16 分類に規定され、それに対して出来上がり寸法の規定を作ろうというもの。

### 計測方法

それでは、どうやって計測するかだが、この辺が曖昧になっている。まず、“衣服を平面に置く”ということだが、肌着であれば平面に置けばほぼ平らになるが、立体に作ったジャケットなどが対象になっており、置き方によっても誤差が出る。“ボタンは留めスライドファスナーは閉じた状態にする”。“折り目、しわを伸ばし巻尺を使って、センチメートル、ミリメートルで測定”、“5.2 から 5.17 に従った適切な寸法を測定”——などと書かれていて、それらの条件で測ることとなっている。

(中山氏は以下、ジャケット、スカートなどの測定点などについて、配布資料に基づいて説明した。5.2 Category A: で、そこに書かれているチェストについて、メジャーをアームホールの下に当てて、測って下さいと書かれている一とし、またジャケットで、チェストはアームホールの 2.5 以下となるなど測り方についても説明した)。

#### 各国のコメント

日本 33 件、フランス 44 件、イギリス 458 件

日本からは、靴下を含めて 120 件のコメントがあったが、日本の業界に影響を及ぼすと考えられる 33 件に厳選したコメントを付けた。上衣で、桁丈が入っていなかったなど、不足しているものを提案。日本の他、英国からは 458 件、フランスから 44 件のコメントがあった。日本総会でそれらを審議するわけだが、ISO の規格は提案されてから 3 年。NP という新しい投票が始まってから ISO の規格になるまで 3 年という時間が決められていた。それが最近では 2 年に短略され、途中の工程を 1 つ飛ばすことも可能になっている。しかし、今回の日本の総会で、英国から出された 458 件のコメントを調整して、3 年以内で規格にするのは難しいものと思われる。

※CD18890 は、南アフリカより提案された衣服の製品仕上がり寸法に関する内容。JIS、ISO にもその内容がなく注目されていた。CD 案の日付は今年の 6 月 3 日。南アよりの依頼もあって、分科会で約 3 か月間内容を検討。当初 120 件を超すコメントなどを集約して日本から 10 月 16 日にコメントを提出したが、南アよりまだ回答の返事が来ない状況。現在、ニュープロジェクトがアプローブされて CD のドラフトを見ている段階で、この後 CD 投票。それから DIS 投票となる。DIS がレジストレーションされるのが 2015 年 9 月 12 日なのでそれまでに DIS が登録される必要がある。つまり、通常だと、日本総会での審議ではもう遅いということになる。

日本のコメント : Ge

コメントは、Ge=ジェネラル: 一般的なもの、Te=テクニカル: 技術的なもの

の、ed=エディトリアル：編集上のもの—に区分されている。日本の33件の内訳はGe 4件、te15件、ed14件。日本のコメントのうちGeでは、“この国際規格の測定方法は、アパレルメーカーと生産者との間の取引を目指しており、小売業者や消費者が含まれていない”。あくまでも発注者と生産者の間だけの規格にしてもらいたい、というのが日本のコメント。Geで見るとフランスは、“複雑である”、イギリスからは“コンシューマーズの使用については説明されていない”“アパレルと小売業者なのか、製造業者とアパレルの関係なのか、そこをはっきりして欲しい”——などの意見があった。要は、国際規格になった時に誰が使うのか。日本が提案したように、アパレルと生産者との間なら、アパレルが発注する時にアパレルが仕様を決め、それに基づいて製造していけばいいのであって、この規格が消費者を巻き込んでしまうのはまずいのではないか。今回の総会で、このCD 18890につき込む時間はそれほど多くないと思う。

中山氏は、日本とフランス、イギリスのコメントを説明したが、ここでは日本のコメントの一部に絞り込んでまとめてみる。

- ・肩幅（E1、配布資料）の測定は、背面から測定する必要がある。背面は、目視による平らであることを確認することが重要。
- ・桁丈の追加。
- ・裾周りは直線で測るのではなく、裾はカーブしているのでカーブに沿って測る。
- ・アジャスターの付いたスリップで、総丈の測り方もアジャスターを閉じての測り方を提案
- ・ブラジャーのカップは、デザインやサイズによって多様な形状をしているため、メジャーをブラジャーのカップ下辺から70%の点を通して計測する合理的な意味や根拠がない。70%という具体的・特定の数値を設定しない。
- ・その代り、「メジャーを通す位置は適切に決定すること」という任意の場所を決めることが可能な記述に修正する。

今後の予定だが、9月7～11日に日本で開催する総会で各国からのコメントを調整する。調整後CD（委員会原案）として投票に掛けるものと思う。

【講演 2】 ISO/TC133 CD18890 (WG4) WD5971 (WG3)

「レッグウェア関連の進捗」

ISO/TC133 国内審議委員会分科会委員 日本靴下協会 (株)ナイガイ鈴木 孝氏

鈴木氏は、CD 18890 は、靴下業界にとっても影響が出て来る内容であり、これが ISO になると大変であることから、「日本靴下協会として国内審議委員会に参加し、靴下業界に影響の無いように取り組んでいこうとしている」とこれまでの経緯を説明。次いで、WG4 の CD 18890 と WG3 の WD5971 のうち、レッグウェア関連について話しを進めるとして、まず、配布資料レッグウェア関連の進捗でソックスの図を示し、提案内容を説明した。鈴木氏の説明概要は以下の通り。



CD18890

ソックスの基点で「S1、S4の踵側基点 the lower end of the gore in the heel を通る bottom of the heel としているが、gore が分岐しているなど複雑な形状のヒールの場合、基点を定めにくい。CD 案だと踵が 2 つに分岐しているとエンドが 2 か所あって曖昧になる。日本はゴアラインを延長した踵のエンドのポイントを踵のポイントにしている。つまり、日本のやり方は 1 か所。ゴアラインの形状が複数になった場合、CD 案では決められないが、日本案では決められる。それが日本の主張。また、踵ゴアラインで 2 つ折りして糸止などの装飾をしている場合 S1、S4 の計測は困難になる。5 本指ソックス、シューズインソックスなど両サイドを折り線として甲側と底側を合わせて畳む靴下の場合、CD 案だと計測しにくくなっている。追加提案だと計測できるので、修正している。

WD5971 (WG3)

鈴木氏は、パンティーホース (パンスト) の計測装置を示し、「非常に驚いた」提案で、「こんなものが通ったら大変なことになる」と思い、「委員会に参画する 1 つのきっかけになった」。当初は南アフリカよりパンストの測定方法として提案された。図の器具を使って伸び寸法を測るものだが、当初新規提案として取り上げられなかった。それをフランスが引き継ぎ、WG3 WD5971 のサイズ表示として新規提案された。これについては現在検討中。

提案内容の概要は以下の通り。

- ・パンストのサイズ提案は①身長②体重、または①身長②ヒップで行う。

- ・適合サイズは、パッケージ、ラベル等に明白に識別可能にするべき。
- ・適合サイズは、販売する市場での身長と体重（またはヒップ）の分布グリッド表を基にした識別表から得ることができる。

鈴木氏は以下、ISO・WD5971 の適合サイズ表（フランスの身長とヒップ/体重分布表より）に基づいて身長（縦軸）と体重（横軸）、身長（縦軸）とヒップ（横軸）の識別表について説明した。

各国の体型の分布図・分布表から各国の識別表を取り出して、それをパッケージあるいはラベルに表示するべきであるというプロセス標準を提案。それを日本の分布図に当てはめて表示するべきだというもののようなのだ。これについて日本靴下協会では、パッケージ、ラベルに識別するための表示スペースがあればいいが、コンパクトなパッケージもある。一様に表示するのはどうか。また、8559-2 の中でパンティーストッキングについては、身長・ヒップ、身長・体重の範囲表示があり、それで十分であること。従って、5971 は必要ないーと考えている。

以上。今後とも日本靴下協会として積極的に参加していきたい。